



イラスト：恐竜くん
©Masashi Tanaka

◆特集	令和8年度特別展 ちば恐竜博 — ^{ハンター} 驚異の捕食者たち—	2
◆研究員のしごと	歴史資料の整理 —資料が展示室に並ぶ前—	4
◆展示づくりの裏側	「イモムシ・毛虫」展	6
◆博物館資料の紹介	生きた状態で保存する資料「リビングコレクション」	7
◆教育普及事業の紹介	11年目のアリオ博	8



千葉県立中央博物館に、恐竜たちが帰ってきました！ これまで、千葉県立中央博物館では、大型恐竜の骨格を公開する展示会を3回開催しています。平成24年春に、科博コラボ・ミュージアムin千葉「恐竜アロサウルスとその時代の生き物たち」、同じく平成24年秋には特別展「ティラノサウルスー肉食恐竜の世界ー」、そして、平成30年夏は特別展「恐竜ミュージアムinちば」を開催しました。いずれの展示でも、大勢の来館者をお迎えすることができ、たいへんな賑わいとなりました。

8年ぶりとなる令和8年度特別展「ちば恐竜博ー驚異のハンターハンター捕食者たちー」は、「捕食者を科学する！」をテーマとして、肉食恐竜や巨大な海生爬虫類などの古生物から、現生のワニやライオンなどの肉食動物まで、時代を超えて個性的なハンターたちを一堂に集め、その興味深い生態と驚異的な「パワー・スピード・技・生命力」の秘密を解説します。

展示は7つの章から構成されます。第1章「肉食恐竜の基本」では、肉食恐竜の基本的な形態と特徴を解説します。ケラトサウルス（図1）のハンティングシーンを再現した全身骨格は日本初公開となります。



図1 ケラトサウルス

第2章「多様に進化した大型肉食恐竜」では、半水生適応して主に魚類を捕食したスピノサウルス（図2）など、さまざまに特殊化した肉食恐竜たちを紹介します。



図2 スピノサウルス

第3章「羽毛をまとったハンターたち」では、鳥に最も近い系統であるドロマエオサウルス類（図

3) に焦点を当て、現生の猛禽類の骨格と比較し鳥類への進化を紐解きます。



図3 ヴェロキラプトル

第4章「現生のハンターたち」では、ライオンやワニ、コモドオオトカゲ、サメといったといった典型的な肉食動物のほか、カメレオン、アリクイ、カモノハシなどのユニークな動物まで、幅広い生き物を取り上げます。

第5章「太古の海の支配者たち」では、首長竜や魚竜など、海の生態系に君臨した捕食者を紹介します。日本唯一のモササウルスの全身骨格（図4）は本特別展の目玉展示の一つです。



図4 モササウルス

今回、千葉県から発見された恐竜時代の海生爬虫類の化石を初公開しますので、千葉県にもあった恐竜時代の世界に思いを馳せていただければ幸いです。

第6章「最後の巨大肉食恐竜」では、ティラノサウルスの生態について掘り下げ、最新研究で話題沸騰のナノティラヌスも取り上げます。ここでは脳腫瘍の跡が見つかったゴルゴサウルス（図5）の全身骨格が見どころです。



図5 ゴルゴサウルス

第7章「さまざまなハンターたち」では、現生のクモやカニ、昆虫、貝類など、だれもが見たことのある身近にいるハンターに注目し、そのユニークな捕食様式を紹介します。

特別展の総合プロデューサーは、サイエンスコミュニケーター、恐竜イラストレーターとして活動する恐竜くん（田中真士氏）です。恐竜くんならではの解説やダイナミックな復元画の数々、そして恐竜くんによる音声ガイドもお楽しみください。

会期中には、「さわって学ぼう！化石&恐竜レプリカ」や、「恐竜の缶バッジをつくろう」など、当日参加可能な行事も多く実施します。

この夏、大勢の方に足を運んでいただければ幸いです。捕食者として独自の進化を遂げたユニークな生きものたちの多彩な世界をお楽しみください。

事業部長（兼）研究部長 伊左治 鎮司

研究員のしごと

歴史資料の整理－資料が展示室に並ぶ前－

地域連携課 須田 華那

歴史を研究するにあたって、私たちは様々な史料を扱います。史料は、絵画や写真、映像、遺物、伝承など多岐にわたりますが、なかでも文字が書かれた文献史料は、歴史学にとって欠かせないものです。友人どうしの手紙から役所への提出物、日記や日常生活の備忘録に至るまで、多種多様な史料が現在に伝わっています。ちなみに、歴史研究の材料を「史料」と呼び、博物館の収蔵物を「資料」と呼びます（つまり、「資料」ではない「史料」もたくさん存在します）。ここでは、博物館の収蔵物であるという点を強調して「歴史資料」という言葉を用います。

博物館の展示室は、現代人が史料と出会う最も身近な場所の一つです。それでは、ケース内に陳列された資料は、どのような道筋をたどって博物館までやってきたのでしょうか？ここでは、当館所蔵の歴史資料（主に江戸時代以降の文献）が皆さんにお披露目される前の作業を紹介します。

歴史資料の多くは、博物館による購入や、所蔵者からの寄贈を通じて博物館にやってきます。例えば、〇〇家からまとめて寄贈されたものは「〇〇家文書」などと呼ばれることになります（この一定のまとまりのことを「文書群」と呼びます）。「文書」といっても、実際はそれ以外のもの（絵画や写真など）が含まれることも多くあります。もちろん、「〇〇家文書」という塊のままでは、文書群の中身を把握できず、博物館の調査研究や展示、教育普及

に利用することができません。まずは、文書群の所蔵者からの聞き取りや当該地域の歴史を調べることが非常に重要です。それに加えて、現状記録と目録作成を主要な柱として文書群を分析していきます。

現状記録

現状記録とは、博物館資料として整理する前に、史料の位置や並び方の状態を記録する作業です。例えばある古文書が個人宅の蔵に残されているとすると、「蔵の1階西側にある筆筒の、最上段の引き出しにあり、天保10年代の古文書と一緒に紐で縛られていた」という記録を、メモや写真、動画などの形で残します。これらの情報によって、資料の年代比定や使用・保管方法の調査が進展する可能性もあります。資料受入時の状況は千差万別であるため十分に記録できないこともありますが、可能な限り記録を残すことで、後々の研究に生かします。

目録作成

このあとは、いよいよ文書群を解剖して目録（資料リスト）を作成します。目録は文書群のプロフィール帳ともいえる重要なリストです。資料の年代や差出、宛所などを読み取ります。特徴的なキーワード（例えば災害や当時の社会状況への言及）があれば、併せて記録します。このキーワードはのちの展示準備にも大変役立ちます。令和7年度企画展

展示づくりの裏側

会期：令和8年6月27日(土)～9月27日(日)
会場：生態園オリエンテーションハウス

「イモムシ・毛虫」展

地域連携課 伴 光哲

皆さんは、イモムシやケムシにどんなイメージを持っていますか？独特な円筒形の体に、長い毛が生えているケムシに「触ったらかゆそう・・・」と思う人も多いのではないのでしょうか。また、毛のないイモムシに触れると、むにむにとした感触があります。これを苦手に感じる人も多いかもしれません。昆虫学者でも「イモムシや毛虫は苦手、触りたくない」という人がいるくらいです。また、植物の葉や花を餌とする種が多いため、場合によっては農作物や街路樹等に害を与える存在とされることもあります。

一方で、その姿形を「かわいい」と感じる人もおり、絵本やアニメのキャラクターの題材にもなっています。近年では、イモムシや毛虫のみを扱ったハンドブックやホームページもあるほどです。また、成長するとサナギを経て、チョウやガへと姿を変える過程が「神秘的」とされることもあります。いずれにせよ、好きか嫌いかは別として、昆虫の中では世間に知られている方ではないのでしょうか。

さて、そんなイモムシ・毛虫を博物館で展示するには、他の昆虫と同じようにはいきません。なぜなら「乾燥標本を作ることが難しい」ためです。イモムシや毛虫は体の表面が柔らかく、また水分も多いため、普通の昆虫のように乾燥させて標本を作ることができません。また、イモムシ・毛虫をはじめとした昆虫の幼虫の保存方法としてはアルコール液浸標本が一般的ですが、色が褪せやすい等の問題があり、展示用の標本としてはやや不向きな面があります。

この問題に対し、凍結乾燥法という特殊な方法を用いることで、乾燥標本を作ることになりました。この方法を使うことで、イモムシや毛虫はもちろん、他の昆虫の幼虫の標本も作ることができます。

また、生態写真を多く用いることも、心がけた点



写真1 凍結乾燥法を用いて作成したセスジズズメ幼虫の標本

の一つです。ある程度体が大きく、またカメラの届く範囲にいる種に限るという条件はつきますが、動きが緩慢で葉の上に静止していることが多いイモムシや毛虫は、他の昆虫と比べ、比較的写真での記録がしやすい傾向があります。

中央博物館に隣接する生態園には、さまざまな植物が生えており、それらを餌とする多くのイモムシや毛虫が生息しています。そんな彼らの中には、植物ではない意外なものを食べたり、成長するとチョウやガではない別の昆虫になる種もいるなど、知られざる一面を持っています。

この夏は、知っているようで知らないイモムシ・毛虫たちに会いに、生態園のオリエンテーションハウスにお越しください。



写真2 様々なイモムシ・毛虫。この中にチョウやガではない虫が1枚混ざっていますが、どれでしょうか？正解は展示会場で！

博物館資料の紹介

生きた状態で保存する資料「リビングコレクション」

資料管理課 水野 大樹

水族館や植物園では生きた動植物を見ることができですが、博物館で見られる多くの動植物は剥製や標本になっていて、生きていませんね。しかし、実は博物館にも生きた状態で保存している「リビングコレクション」というものがあるのです。中央博物館のバックヤードには、印旛沼や手賀沼の水草を生きた状態で保存している実験エリアがあります（写真1）。



写真1 生きた水草を保存するための水槽

印旛沼や手賀沼には、水の中に葉を茂らせる沈水植物をはじめとした希少な水草が生育していた記録がありますが、水環境がかつてとは大きく変わった現在、これらの植物がどの程度残っているかは、水中の調査をしない限り知ることは難しいかもしれません。本来であれば、可能な限り生育地を調べ、生育環境を守ることで、個体群の絶滅を防ぐことが望ましいかもしれません。しかし、全ての生育地でそのような対処ができるわけではありません。そこで、生育に影響がない範囲で標本を作成し、過去の生育の記録を後世にわたって残しておくことが、博物館の重要な使命であると私は考えていますが、現在生育している個体群の系統が失われないよう、生育地

とは違う場所で保全しておくことも大切なことだと思います。

中央博物館では、かつて生育していた水草を、沼底の泥の中に眠る種子から再生させる取り組みを行ってきました。今ではほとんど見るできないガシャモクという沈水植物も、水槽で育てると意外にも勢力旺盛でたくさん葉を広げています（写真2）。このようなところを見ると、生育地の水環境が変わってしまったことを思い知らされます。今は普通にみられる植物が、近い将来、あっという間に絶滅危惧種になってしまうことも容易にあり得ます。我々人間の手によって、無意識のうちに植物の生育環境が失われることが無いよう意識していきたいものですね。



写真2 葉を旺盛に広げるガシャモク

なお、今回御紹介したリビングコレクションは通常は一般公開していませんが、2026年9月13日(日)に、保存している水草を実際に触って比べられるイベントを開催します。事前申込制で定員もありますので、興味のある方は当館ホームページを御覧ください。

教育普及事業の紹介

11年目のアリオ博

地域連携課 栗田 隆気

中央博では、地学、生物、環境などの自然史から歴史や民俗まで、博物館が扱う様々な分野の面白さ・驚きを伝えるべく、一年間に100に迫る講座・観察会等の行事を行っています。このうち多くは博物館の中や野外で開催されるものですが、なかには県内にある施設に出張して開催している行事もあります。

今回はその一つ「アリオ博」をご紹介します。アリオ博は千葉市中央区の大型商業施設「アリオ蘇我」と中央博物館がコラボして、2カ月に一度、同施設で開催しているイベントです。アリオ蘇我に訪れるお客様に博物館が収蔵する資料をご覧いただき自然や文化に興味を持っていただき、ワークショップやクイズ大会を通じて楽しんでいただきながら、あわよくば中央博にも足を延ばしていただきたい…というちょっとした下心を込めて、会場を盛り上げています。

アリオ博

アリオ博は2016年から始まり今年で10年目、プラス1年目という非常にきりの良い、新たな門出とも言える年を迎えました。最初は「千葉県立中央博物館の課外授業 in アリオ蘇我」、通称「アリオ博」として開始し、中央博物館の展示のご紹介、企画展など期間限定の展示に関するサテライト展示、ワークショップやクイズ大会を行ってきました。深海生物に関するパネル展示や甲冑の展示、しおりやペーパークラフト、キーホルダーづくりなどがあり、子



ぬり絵&ミニ大漁旗づくりに挑戦中!

どもから大人まで楽しめるイベントを企画してきました。しかし、新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、数年間、休止せざるをえない状況になってしまいました。

再開 アリオ博!

そんなアリオ博が、令和7年度からなんと「アリオ博」に生まれ変わって帰ってきました! 奇数月の第3土曜日(週は前後する場合があります)に開催し、同じ時期に博物館で開催している特別展・企画展・季節展などをテーマにしたミニ展示を設営して当館研究員が解説しているほか、ワークショップやクイズ大会も行っています。令和7年度は食べられる海の生きもののほく製や石器・土器などの触れる展示、ぬり絵や缶バッチづくりなどのワークショップを実施しました。クイズ大会にはチーバくんも参戦し、ときには参加者を惑わせています。



本物の土器に触れることもあるかも?

今年も開催 アリオ博!!

今年のアリオ博は特別展「ちば恐竜博—驚異の捕食者たち」、秋の展示「ジオパーク巡回展 地球時間の旅」、そして春の展示「房総の茶」などにちなんだイベントを企画しています。各イベントの開催日は当館ウェブサイトや行事案内から確認できますので、ぜひお誘いあわせのうえ、アリオ蘇我までお越しください。 ▲詳細はこちら



編集後記

今年度も中央博物館で行われる様々な展示や研究、博物館資料を紹介していきます。ほかでは読めない内容も、たくさん盛り込みたいと思いますのでどうぞご期待下さい。

中央博物館だより No.77 令和8年7月発行

編集・発行 | 千葉県立中央博物館

本館 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 TEL 043-265-3111 FAX 043-266-2481
分館海の博物館 〒299-5242 勝浦市吉尾 123 TEL 0470-76-1133 FAX 0470-76-1821
大利根分館 〒287-0816 香取市佐原ハ 4500
大多喜城分館 〒298-0216 夷隅郡大多喜町大多喜 481
<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/>

